

日本語OPIの超級ロールプレイとジェンダー的問題*

銭坪玲子**

The Superior Level Role Play in Japanese OPI and Gender Related Problems

Sachiko Zenitsubo**

キーワード

日本語OPI、超級、ロールプレイ、敬語、ジェンダー

要旨

外国語の会話能力を測定するためのインタビュー試験、ACTFL (The American Council on the Teaching of Foreign Languages: 全米外国語教育協会) のOPI (oral proficiency interview) について、ジェンダー的視点から考察する。具体的には、超級ロールプレイにおける課題の一つ、被験者からの敬語の抽出、という点に焦点をあてる。ジェンダー的格差が依然として大きい日本社会の現状を踏まえたうえで、日本語OPI特有の課題について指摘する。本論文は、日本語OPIの超級ロールプレイにおける効果的な発話抽出を目指すための試みでもある。

第一章 日本語教育の新しい流れと日本語OPI

近年、日本語教育の領域では、教授法、研究法、評価基準などにおいて、大きな変化がみとめられる。なかでも、「言語のためのヨーロッパ共通参照枠」(CEFR: Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) が与えた影響は少なくなく、これらに基づき、国際交流基金は「課題遂行能力」と「異文化理解能力」をキーワードとする新しい枠組みを作成し、日本語教育に提供しようと試みている。「相互理解のための日本語」を理念とするJFスタンダードといわれるものである。

EU (欧州連合) という共同体を抱えたヨーロッパでは、言語政策にも力を入れており、外国語教育が共存のための不可欠な要素の一つとして捉えられている。母語の他に2言語の習得が奨励されており、それらの多様な言語の能力を測定するための共通した評価基準が、欧州評議会(Council of Europe)により提出されたCEFRである。複言

語・複文化主義から生まれたCEFRの考え方などを参考として、日本国内の日本語教育は、これまでの文法重視の教育から「Can-do」つまり何ができるのか、という実際の運用能力を重視する教育を目指す方向へと移行しつつあるといえる。1984年に開始された日本語能力試験も例外ではなく、課題遂行能力の測定を軸に2010年から問題内容等が改定され、レベルも4段階から5段階に増やされることとなった。また、一方で、学習者主体の教育、共同学習といった教室活動に関する提言もおこなわれつつあり、従来の教師主導のクラス運営を見直そうとする動きも出てきている。研究領域においても、学際的な視点すなわち言語学、心理学、社会学など、多方面からのアプローチが試みられるようになった。日本語教育はいままさに教育パラダイムの転換に直面しているといえるだろう。

ところで、日本語教育において近年注目されているものには、ヨーロッパのCEFRのほかにアメリカで考案されたOPI (oral proficiency interview) というものがある。OPIとは、ACTFL (The American Council on the Teaching of Foreign Languages: 全米外国語教育協会) によって開発された、外国語の会話能力を測定するためのインタビュー試験のことである。特定言語のみを対象としない汎言語的なテストであり、OPIにおいても、目標言語を用いて何ができるのか、を測定することが目的とされている。現在、OPIは英語を初めとして、フランス語・ロシア語・スペイン語・中国語・日本語など諸言語に対応している。本来、言語運用能力を測定するためのテストであるOPIは、教授法や言語理論等とは関わりのないものだと既定されているが、最近ではOPIの考え方に基づいた教室活動の提案や、OPIで得られたデータを利用した研究などが発表されている。OPIはCEFRとともに、日本国内の日本語教育に、一つの新しい方向性を与えつつあると言ってもいい

* Received March 15, 2010

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 国際交流学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

いかかもしれない。とはいえ、日本語OPIについては、まだ多角的な視点から十分に考察されているとはいえない部分もあるのではないと思われる。そこで、本稿では、日本語OPIそのものに焦点をあて、ジェンダー的視点から考察を試みたいと思う。具体的には、超級レベルのロールプレイに求められる敬語表現の抽出について考えてみたい。これは、日本語OPIのより充実した発話サンプルの抽出を目的とする試みであり、また、日本語OPIに関する議論を契機として、日本社会及び日本語教育にみられるジェンダー的諸問題を再考するという試みでもある。

第二章 日本語OPIの超級ロールプレイと敬語表現

まず、OPI（口頭能力インタビュー試験）について簡単に紹介したい。OPIとは、標準化された規準やインタビュー構成を用いて、ある人間の言語運用能力を測定するものである。インタビューは30分以内で、試験官と被験者の1対1で行われる。会話の内容は被験者の発話次第で柔軟に変容するが、インタビュー構成には厳格なルールがあり、導入部、レベルチェック・突き上げ（反復過程）、終結部という構成が定められている。また、日本語OPIの場合、初級－中あるいは初級－下から超級の被験者に対しては、途中でロールプレイをおこなわねばならない¹⁾。判定尺度は超級・上級・中級・初級の4つの主要レベルがあり、上級・中級・初級はさらに、それぞれ－上・－中・－下という3つの下位レベルに分けられる。また、OPIは、どの試験官がおこなっても同じ判定が出るという点において、「妥当性のある評価方法」「信頼性のある評価法」であるとされている（牧野 1999 14頁）。

多様な被験者を対象として妥当な判定を下すためには、効果的な発話の抽出が必須の課題となる。試験官は、そのための技術を磨き、習熟せねばならない。そもそも、初対面の被験者の会話能力を30分以内で判定するのは容易なことではないが、とりわけ日本語OPIのなかで適切な会話抽出が難しいと思われるのは超級レベルである。というのは、超級レベルのロールプレイでは、敬語とくだけた表現を使用する二つのロールプレイを行わねばならず、ときおりここに困難が生じるからである。

OPIのなかで、ロールプレイは次のように規定されている。「ロールプレイは、普通の会話のやりとりの中では自然に引き出せない言語的機能を

抽出する方法」である（牧野 1999 51頁）。インタビュー構成からみれば、ロールプレイは、導入部と終結部にはさまれた段階、つまり、レベルチェック、あるいは突き上げとしておこなわれるものである。超級ロールプレイでは、「複段落の談話を展開して、日常的な話題はもとより専門的な話題についても、常体と敬体の両方を使って会話ができるかどうか」（牧野 1999 70頁）が確認される。フォーマルとインフォーマル、つまり、敬語とくだけた表現の両方を、試験官は被験者から引き出さなければならない。どちらか一方でも欠けていた場合は、他の部分でどんなに質のいい発話をしていても、超級としては認められないのである²⁾。

超級の条件とされる敬語が、現代日本人にとっても非常に重要であることは調査からも明らかである。例えば、文化庁の平成19年度「国語に関する世論調査」³⁾によると、「日本人全般の国語力にはどのような課題があるか」という問いについて、最も多かった答えは42.1%で「敬語等の知識」であり、平成14年度調査の35.3%を上回る結果となった。また、平成17年度の調査では、敬語の使用について、「社会生活を営む上で」敬語を使いたいと答えた人（「必要だから使いたい」と「使わざるを得ないので使いたい」の合計）は92.5%である。敬語に対する日本人の意識の高さがうかがえる結果であり、日本語OPIの超級レベルで敬語が不可欠な要素として掲げられていることは妥当だといえるだろう。

しかし、問題はインタビューにおける敬語の適切な抽出方法である。超級ロールプレイにおいて、フォーマルな場面における敬語の使用を引き出そうとする際、しばしば困難がきまとう。それは一体なぜであろうか。試験官と被験者の関係性、具体的には、試験官が女性で被験者が男性の場合に、設定に不自然さが生じるのではないかという仮説から議論を始めたい。例えば、所定のロールカードに用意されている次のような設定の場合について考えてみよう。チーフに交渉する、部長に頼む、部長を説得する、上司を説得する、など。これらの設定では、女性の試験官がチーフ、部長、上司を演じ、被験者である男性は、それぞれの部下を演じなければならない。現代日本社会において、このような関係性はどれほど一般的であろうか。

『日本語改訂版ACTFL-OPI試験官養成用マニュアル（1999年改訂版）』には、次のような記述が

ある。

設定した場面が目標言語の文化にふさわしく、文化的に適切な言語行動を抽出するように構成されているかどうかに注意する。例えば、目上の人意見に疑問を差し挟むというのは西欧文化ではなんら問題のないことだが、日本語やインドネシア語のような言語ではそのような挑戦的なことをさせるロールプレイは不適切であるかもしれない。(牧野 1999 71頁)

ここに書かれている通り、言語と文化は密接にかかわりあっており、OPIは汎言語的なものとはいえ、日本語OPIにふさわしい形で適用することが望まれている。日本文化になじみにくい部分があれば、これらの点を明らかにし、対処方法を考えねばならない。ロールプレイを実施する際にも、日本文化や習慣を十分考慮して臨むことが必要だといえる。

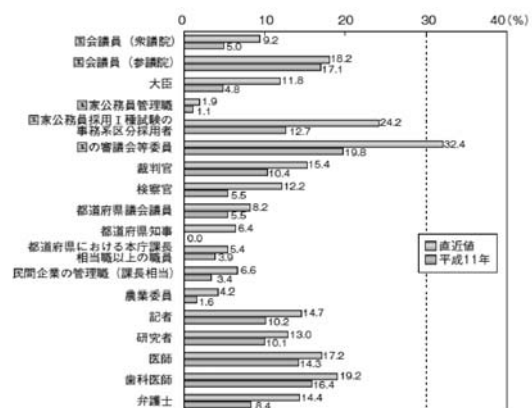
ロールプレイがレベルの判定につながる効果的なものになるかどうかは、試験官がロールプレイの主導権をとることなく決められた役割をうまく演じられるかどうかという点にかかっている。さらにそれは試験官が教師にありがちな言動を控えて、現実的で文化的にも実際に近い会話のやりとりで終始することができるかどうかということでもある。(牧野 1999 68頁) * 傍点部：筆者による

試験官が女性で、被験者が男性であった場合、女性の上司－男性の部下、という設定において、それぞれが「決められた役割をうまく演じ」、しかも、「現実的で文化的にも実際に近い会話のやりとり」をすることがどれほど可能であろうか。日本社会において、「現実的で文化的にも実際に近い会話」を実現するとすれば、どのような設定がふさわしいといえるのか。「ロールプレイをするときは、被験者の年齢や背景にあう役割を与える」(牧野 1999 69頁) ことが大切であるとすれば、同時に、試験官についても、その性別・年齢、その他の背景にあう役割を設定することが重要となる。この点について、より詳しく考えてみたい。

第三章 日本社会にみられるジェンダー問題

日本語教師には男性より女性の割合が多い、とよく言われる。実際の教師数とは異なるが、一つの目安として、日本語教師を目指す人々の試験である日本語教育能力検定試験の受験者男女比を見てみたい。ここ数年漸増傾向が見られるとはいえ、1994年から2009年まで16年間、受験者全体に対する男性の割合はほぼ20%前後である^{iv}。

OPIの試験官は、ほとんどの場合、日本語教師であると考えられるため、女性である試験官は少ないと思われる。したがって、女性試験官が直面しうる問題とは日本語OPIの課題の一つでもあるといえるだろう。それでは、超級ロールプレイで求められるような上司と部下の関係、また管理的地位と女性との関係は実際どのような状況にあるのか、統計資料を参考にみていきたい。内閣府『男女共同参画白書 平成21年度版』^vによると、国会議員や地方議員、研究者や弁護士など、各分野における「指導的地位」に女性が占める割合は、10年前と比較すればそれぞれ値が高くなっているとはいえ、30%を超えているのは国の審議会等委員のみで、それ以外はより低い割合にとどまっている(図1)。



- (備考) 1. 「2009年30%」の目標のフォローアップのための指標より。
 2. 産直欄に類しては、国連平成20年のデータ。国会議員(衆・参)、大臣、都道府県知事については21年5月、国家公務員管理職については19年1月、医師及び歯科医師については18年12月、農業委員については18年10月のデータを使用。
 3. 平成11年のデータのうち、医師及び歯科医師については12年12月のデータを使用。
 4. 国家公務員採用I種試験事務系受検者の平成11年のデータは、同区分に合格して採用された者(独立行政法人に採用された者も含む)のうち、勤務先、国会議員に採用された数を除いた数である。
 5. 国家公務員管理職の平成11年のデータは、一般職給与法の行政職俸給表(一)及び指定職俸給表適用者に占める割合であり、審議会はそれらに附帯者職員(行政職俸給表(一)、指定職俸給表及び附帯者等俸給表適用者)が加わったものである。

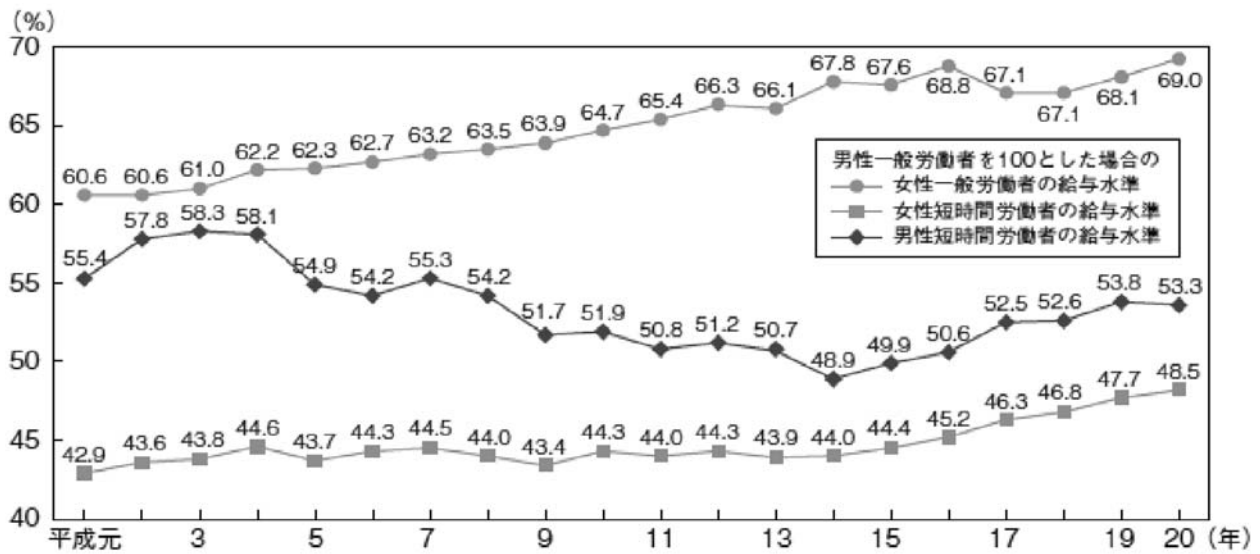
図1

各分野における「指導的地位」に女性が占める割合(10年前との比較)

(出典：内閣府『男女共同参画白書 平成21年度版』)

また、給与における格差については、女性一般労働者は男性一般労働者の69.0%であり、この約20年間で10%の伸びが見られたとはいえ、依然と

して大きな格差が存在していることがわかる（図2）。



(備考) 1. 厚生労働省「賃金構造基本統計調査」より作成。
2. 男性一般労働者の1時間当たり平均所定内給与額を100として、各区分の1時間当たり平均所定内給与額の本準を算出したものである。

図2

労働者の1時間当たり平均所定内給与格差の推移 (男性一般労働者=100)

(出典：内閣府『男女共同参画白書 平成21年度版』)

2007年、従業上の地位別女性の構成比では、雇ユーザーが86.7%であるのに対して、自営業主は5.8%。また、管理的職業従事者のうち、女性が占める割合は0.7%であった^{vi}。部長・課長・係長など役職者に占める女性割合は、部長が4.1%、課長が6.6%、係長が12.7%^{vii}。学校管理職等における男女別状況によると、小学校・中学校・高等学校の校長に占める女性比率は、それぞれ17.9%、4.8%、5.0% (教員総数の女性比率は62.7%、41.4%、28.1%)、短期大学・大学の学長では、それぞれ15.1%、7.4% (教員総数では48.4%、18.2%) となっている^{viii}。

このような日本女性の状況を諸外国と比較して

みたい。それらを測るための指数として、国際連合開発計画「人間開発報告書」(UNDP: United Nations Development Programme HUMAN DEVELOPMENT REPORTS) で発表されているHDI (人間開発指数)、GDI (ジェンダー開発指数)、GEM (ジェンダー・エンパワーメント指数) がある。「人間開発報告書2009」^{ix} によれば、2009年の日本の順位はそれぞれ以下の通りである。HDI (人間開発指数) : 10位 (182カ国中)、GDI (ジェンダー開発指数) : 14位 (155カ国中)、GEM (ジェンダー・エンパワーメント指数) : 57位 (109カ国中)。HDIに比べると、日本はGEMの値が低いことがわかる (図3)。GEMは、女性の国

(日本順位/測定可能国数)								
報告書発行年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
HDI	9/62	9/173	9/175	9/177	11/177	7/177	8/177	8/179
(値)	(0.928)	(0.933)	(0.932)	(0.938)	(0.943)	(0.949)	(0.953)	(0.956)
GEM	31/64	32/66	44/70	38/78	43/80	42/75	54/93	58/108
(値)	(0.520)	(0.527)	(0.515)	(0.531)	(0.534)	(0.557)	(0.557)	(0.575)

(備考) 国連開発計画 (UNDP) 「人間開発報告書」より作成。

図3

HDI及びGEMにおける我が国の順位の推移

(出典：内閣府『男女共同参画白書 平成21年度版』)

会議員比率や専門職・技術職・管理職比率、男女の推定勤労所得から算出されるが^x、所得面からいけば、GEM上位国と日本人はほぼ同レベルであるにもかかわらず、日本のGEM値が低いということは、日本女性の国会議員・管理職に占める割合、女性の賃金を男性の賃金と比較した値がGEM上位国と比べて極めて低い水準にあるからである（内閣府男女共同参画局 2004）。

これらの統計資料から見れば、日本社会における女性の地位は、他の先進諸国と比較して高いとは決していえない。日本語OPIの超級レベルのロールプレイカードにみられる設定のうち、上司の試験官と部下の被験者という設定は、試験官が女性である場合は現実の日本社会にふさわしい設定であるとは言いにくいから、使用する際には配慮が必要であろう。

第四章 まとめと今後の課題

日本語OPIにおいて、より効果的に発話抽出するためには、日本社会におけるジェンダーの問題を正しく理解し、それらに対処していかねばならないということが、これまでの議論によって明らかになったのではないと思われる。具体的には、超級ロールプレイを実施する際、「現実的で文化的にも実際に近い会話のやりとり」（牧野 1999 68頁）をするために、「設定した場面が目標言語の文化にふさわしく、文化的に適切な言語行動を抽出するように構成されているかどうか」に注意する」（牧野 1999 71頁）ことが求められるであろう。つまり、試験官が女性であった場合は、ロールカードの選択やロールプレイの設定について注意し、不適当なロールカードの使用は控えるとか、あるいは、そのような設定に違和感を覚えずにすむような訓練を積むといった配慮が必要だと思われる。

OPIは汎言語的なインタビュー試験であるが、それぞれの言語において、「現実的で文化的にも実際に近い会話のやりとり」や「目標言語の文化」が重視される。ロールプレイの際は、所定のカードだけではなく、自作のロールプレイカードを利用してもかまわないため、日本文化に適切なカードの作成を試みることも、有効な対応策の一つである。ロールプレイの設定は、日本社会のジェンダー的格差という現状をも十分考慮してなされねばならないし、所定のロールカードを使う場合もちろん、カードの選択において一定の配慮が必要であろう。

女性の上司と男性の部下という設定でロールプレイを始めたため、女性である試験官が思わず、「君、～してくれないか」などといったステレオタイプ的な男性言語を使用してしまった、というケースもある。この設定の不自然さを、男性の上司になりきる、という方法で回避しようとした例であろう。このような問題を解決するためには、上述したような試験官側の工夫が求められるであろうし、また同時に、日本社会の現状に向き合い、ジェンダー的格差を調整していこうとする取り組みも望まれるのではないだろうか。

最後に、ここでは触れなかったが、OPIで試験官に求められる「突き上げ」^{xi}、それから、超級で求められる「トリプルパンチ」^{xii}といった要素について、なかなか習得できない試験官も多いようであるということを目指したい。これらも、日本社会や日本文化のあり方と関連があるのではないかと推測されるため、あらためて検討してみたい課題である。

OPIはCEFRと同様、日本語教育に様々な示唆を与えてくれるものである。今後も、より多くの実践と研究を期待したい。

【文献】

- 内閣府男女共同参画局 2004 『男女共同参画白書 平成16年度版』国立印刷局
 内閣府男女共同参画局 2009 『男女共同参画白書 平成21年度版』佐伯印刷
 牧野成一 監修 日本語OPI研究会翻訳プロジェクトチーム 訳 1999 『日本語改訂版ACTFL-OPI試験官養成用マニュアル（1999年改訂版）』アルク
 牧野成一 他 2001 『ACTFL-OPI入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る—』アルク

【注】

- ⁱ 『日本語改訂版ACTFL-OPI試験官養成用マニュアル（1999年改訂版）』によると、「ロールプレイは「上級—上」から「上級—中」レベルでは必ず行う。」（66頁）とあるが、日本語OPIの場合は、初級—中あるいは初級—下から超級のすべての被験者に対して行うこととなっている。
ⁱⁱ このように、現在の既定では、被験者の発話のなかで、敬語とくだけた表現の両方が出なければ超級とは認定されないが、日本語学習者のなかには、普段から、くだけた表現を意図的に

使わない、あるいは使いたくないと思っている者がときおり存在する。他の発話部分では申し分なく超級レベルの発話を維持している被験者が、ロールプレイにおいて、くだけた表現を用いなかった場合、判定は上級一上にしかない。この点をどのように考え処理していくのかは、日本語OPIの課題の一つだと思われる。

促すため、丁重ではあるが、対立的な態度をとること」が求められている(牧野 1999 60頁)。

- iii 文化庁「国語に関する世論調査」 http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/index.html
- iv 財団法人日本国際教育支援協会 <http://www.jees.or.jp/>
- v <http://www.gender.go.jp/whitepaper/h21/zentai/index.html>
- vi 総務省統計局「労働力調査」 <http://www.stat.go.jp/data/roudou/index.htm>
- vii 厚生労働省「賃金構造基本統計調査」 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/52-20.html>
- viii 文部科学省「学校基本調査」 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm
- ix United Nations Development Programme
HUMAN DEVELOPMENT REPORTS
<http://hdr.undp.org/en/>
- x 『男女共同参画白書』平成16年度版にも記述があるように、GEM算出はドル換算であるため、GEM値の低下には円安が関係してくる場合もある。つまり、「GEM値は、女性の国会議員比率など、代表的な女性の各分野に関する参加を示す指標以外の要素の変動の影響も受けるものであることに留意しなければならない。」
- xi 被験者の発話をよりハイレベルに押し上げるための試験官の発話行動。
- xii 超級では、トリプルパンチといわれるものを行わなければならない。トリプルパンチとは、最初に、ある話題(上級レベル)について、「突き上げ」(被験者の発話をよりハイレベルに押し上げるための試験官の発話行動)による質問をらせん状に行い、次に、「被験者の意見に反対してみる一わざと難癖をつけるなどして、述べられた意見に反論する役を演じる。」その後、被験者に仮説を要求する、というものである。超級では、それ以外に、超級レベルの発話を抽出するための技術の一つとして、試験官は「あまり親しそうに振る舞わないこと。もっと改まった態度をとること」、「理路整然とした議論や、自分の意見を裏付ける話をする」ことを被験者に